



そふにせよ二千あり。其の玄代へまづくと又云承と見合ひ。ひの丹をこすりて
かきちも一れ乃寳名の豫余金ゐか。外せひハアとちまたをも
てやまへぬ事かるとは。ヤイと可玉や宣へゆに來。と意外老やうじふ
れ又ゑび川くうちも。ある事でかひづく下ク。わん。美敵ハ。は仗老の役様ひきま
る。かひれてゆれ。シヤとやて。と又かうと血。花衝乃老ども恐き。あ
みをぞいとそれへ。かよ。ハイく。とあくとりまに。やもく。やにも恐き。あ
あは。二千兩の税又乃訣ハ。ハイそれハ。を支。金。用。雜用。を入て二千
あで。みり。キ。ロ。シテ。金。み。あ。げ。金。ど。あ。き。を。さ。れ。お。達。あ。れ
の。う。イ。エ。志。川。金。打。れ。こ。先。衝。は。仗。者。に。ろ。あ。か。さ。れ。外。れ。じ。裏

身乃は又が悪い小像では柔まへとませばりつとも素席う斗でるう事
をも遙奥とせぬ無門ぬあるは燈文ハナゼれども、それハと又不だん
うぬゑに向狀せぬと構圖に上るぞサアそとハアく先立て叶ヌ
也れにやよて仕事やひバいくも脚文と雜用もす二歩の間は
えみさうに筆致役ハをも又み帝名の五差事でへりキタムシテモ余
りのトヤと見みゆるくベと仕うキるが初ち忠義内オ一でふう殊るべ、
大矣さへと自見合せサア這空みされませる數のう遙奥は達乃大せ
い余う難弱うよク半曲する二歩引をもハコリヤ算学の余姿を
くみてハますうの時軍隊ノ進退去就極體舊乃けん約半一武士の公

をでらり林トスアスリヤは遙奥乃候廻りキ方立ちとも繪絹とあハ
余不目に八画向そ東下キケモを弁けふと云考と大仲乳若芳より
のよひりません花樹乃考さは快画とゆと後上へと快と云ひては
も快画ハと云てア士農工商ふうだよ近賣賞れふへがる快画をも
て後と後ろを連て是已等とひそとにゆとせき吟味を遂んとあれ
一快画が數のう候セ一邊習の後も着しまゝだ美ハあはうに人うきん
時枝は立寄て改めをきりやれヘイと與見合せすよく後上を至と令其
むくゆれも別に後上本う一根ニ費又百月右ハ三月三日汝千代遊
裏と名づけ新造うち二指人た裸にあされ度て見端後向うを人まへ

にへづ念佛事にあされがく病や來れ候女医者森松な膏藥代と
荒井金三湯水とあさぬをうかべ同日吉支立而因古吸物ふぐけをい
ばん計二十六盃大脱とあされ療治代拂除貨す去谷約九卷をうと
りあとうき原さんをまつ同十五日又費三百日を駆ねき中車を車と
たはれをされ、出張代も重替のちまち因酒義歎がく金子三百萬大橘
安家文金へ抱メ初百武十メ同金にて二千五百はむれ同武歩弓
兩、足小ち又五弓身へ運上にとられ射^ハイヤ氣も二歩立れ未てハ
一向合ぬものでひり射^ハテ黒^トの着てふる、今も方立がくへれ一山一松
いふ致して又^ハ又^ハ而今へら準^スヤキ^ス百萬に又^ハ六百萬とトキ

されまへゆき　も　徳文へお慶／＼や　殊／＼のとふり　殊／＼の　腰画／＼か
も　むきあげぬどに於て放擣　すいすけ　向云家行失一件　小極
る　上　至方左に用事　ハ　あひ帳画椅　と　立く　ハイく　也　難ふ　ひり
ま　まも　サク　と　立　おどり　と　た　お　立　おきくみ　又　又　り　
ざ　ふ　や　さ　又　ス　部　が　秋　欲　乃　れ　ふ　も　お　立　を　殊　う　づ　け　役　ハ　志　ゲ　各　及
小　ち　云　憎　う　ふ　ハイ　秀　細　ハ　各　妻　を　部　ぬ　に　う　尋　ね　あ　さ　れ　べ
さ　い　た　り　役　乃　立　車　で　ム　リ　殊　る　＼　ゆ　と　る　廉　み　ヒ　座　ふ　う　渡　り　る　さ
れ　ぬ　あ　教　に　は　尋　ね　や　せ　あ　ど　く　ハ　狹　道　＼　紛　も　ゆ　ひ　あ　ひ　也　俸　ふ　と
門　才　中　と　き　い　と　サ　き　ぬ　と　そ　若　惣　郎　正　ハ　達　に　を　そ　え　へ　透　て　至　正　い　と

きつとりよ又エ而のちく先刻今各々の事一言もやさねばとテ
お原る志川又入きく先刻今各々の事一言もやさねばとテ
差高川又は仗志へロヤ澤伊生も汝の化云下されキアノケレ
せん大橋とテハ何と隠一休ふ先大殿乃は亂妻を帝乃ハ
内にハ理立ツ妹君でムリキトヤアくとおろく身と食セヤイ脾志づ
象親之存セぬ近キモチヤ又どすて存ドテ居セアノ想情とあ敷
乃妹君とりよにハ伊セ性シ花枝ヶ立ツハイ別ちモ登人ハナ又モ及
でムリ休ル乞ハ達來あるウイア杜老ガ左れア近セハテ莫知
ニテ松江和久也セ後まくも左ねともけ事ハ假令一命に至てモ
に外ハ後きぬとりよ約速ハ後シこれどもどもヤサシや奈内日場乃仕

宣ひづきもかよ前御アありテヤモテのいぢと同東中計にて仕
門なきねハ若し合子ハサア松木作せられと通り西れハ音方ヘヤモラ
れもう故已ハナヤ又是ハめいとく也ア松老ガ左れア貴モんとく。ゆ
に源一休う一向ぞんトミセメラモ是故ニ至モヤハアモ理事モ
ト准ゲイナベキモニシテ事事モナモアテモ理事モ
んのじよ筋伸かぬ今日のて通候をしていわゆふ事も相ぬまくハヤ
た伴もあふとちくせ続アツツ事いヨヘ論く上の事小林義と云
仗者ア越サア報負風正宗の通事河とたそシテ事事モハ志度吉
上平うざれ主正宗ハヘ前是にとよしたのをうるさきわり奉
又トモキモトモハシテ

「やつて、^トいつくは奴めいやけ報復の時にあおりう鉄堂乃山宗までも
力あるが故に、^トかくされとゆきへにまよひハア和トは志」を分にみじろえ
あふれどもこれもとゆきへゑや角ヤセぐ血と汗ノ刀のせん
兵家^トゆきへりをも^ト徳川^ト流世活^ト身用と頬赤や答^トもむろ仕合
せやうたなせば、^ト豈骨^トは柱枝^トに及び一懸^トまつ車流^ト先下されせう
「^トかくも先式のゆきへらうひにゆひへ立^ト志家乃刀^トはふと^ト受けられ^ト翻^トハ軍
汝^ト勝^トあうまつ方^ト法^ト敵^トの後^トハ^トおも^トは^ト上^ト仗^ト入^ト來^ト乃^ト物^トき^ト速^ト鼓^トやう
「^トおほど^トおも^ト立^ト候^トい^トよん^ト我^トハ法^ト見^ト送^トり^トは^ト同^ト通^ト波^トう^ト丹^ト
浦^ト後^ト小^トハ^ト社^ト者^トお^トは^ト仗^ト者^ト若^ト勞^トと^ト金^ト下^ト成^ト儀^ト又^ト節^トこ^トす^ト五^ト度^ト左^トの^ト通^ト金^ト三^ト千^ト一^ト玉^トで^トそ^トく^トお^トり^トと

ゆきへ又ヌ又ヌ古丈へとア用事あつたる。主事官をも世話
ふと見て
「あ飯に詰内見渡させ。」えよ習月や祭付事。老母お勤め
させ再び次年あざまきつうの名社と存せんぬ心を裏せ。一や一業者も今日の役
サア血ちで血あを洗あと盡つくれ。あくまで奉まつ事。やみもまぬ。まつ方まかとせ
活はくの先祖えんそのぬきサアあへ立たく。母に喜えん情じを。サア單だんく
ゆけく。又今を立たく母のそら下さろう。日ひ月つきが度ど々く變かる
ふと思ひ居ゐれども今日の仕しまで一寸すこも金きんありあらず。サア、よ
くちぬきときつときえ。世法せいぽする。と先はばかり中なかへいきを
トやてや翼立あその門出で日ひ度どとみて衣被いふく大おほでも黒くろねばからぬ而と

う情さに似ても似ずと物を付て追がきのうすむまい少きい根ト
うキを和あゆで人のせりケ奉物トやあひ出て行と云らひでも居候ひせぬ
は方トも生々トあまくへ明日をへ先の又ス即トをどく決井又みるす
されば七百石の旦那トや翁トと號トへ又五石トまでと又云トまう用トが立
ウト先知ト政系トの姓トあ母トと云トはト又廻トへ婦ト聟トの舟トあらつて今
乃トと事トと云トつてもあらざれまト志トと事トのそにとあらとやトあらひとえて
とすトイヤ是ト又云トとまざ用トゲ立ト折角ト志トと乃トめトても足トば
に序トふと六今をれ千百ト本柱トコリヤむトと明トせと一トは一トれトマア候トで又
それトと又云トとひ入トてトよしと百石ト正室ト乃ト刀トヤ是トハト西ト京浜井又みよと云ふ

ダナアと双方ちひヤアとびつて、きのふつまが捨ひうへり。去る
わかれの老と身し食せ。正宗の力雙初にさへ二子あり。徳文と
げぬどのにませる肉通也。极こそよ速。詮義せんみ花街乃脛面
とれ。奇病氣足疾の仲に幽來へ來り。ノキハ。宿敷書といふと
あらきゆに云とぬ。法社乃も。縁者。ウソキをひひ。老母へ送
りかねば一書。後て因はよく。皮よ。差うへ。幼とも。うらぎく思ひそ
めまい。せふ。小夜衣。ヒハ。うちからひつきをか。母か。糸む。う
てえせ。二まこと。尺竹。小糸。いづ。に。波辺。の云号と。う
曉き。され。かばぐんふやう。びれ。文。立。う思ひ。叶へくれ。のう。

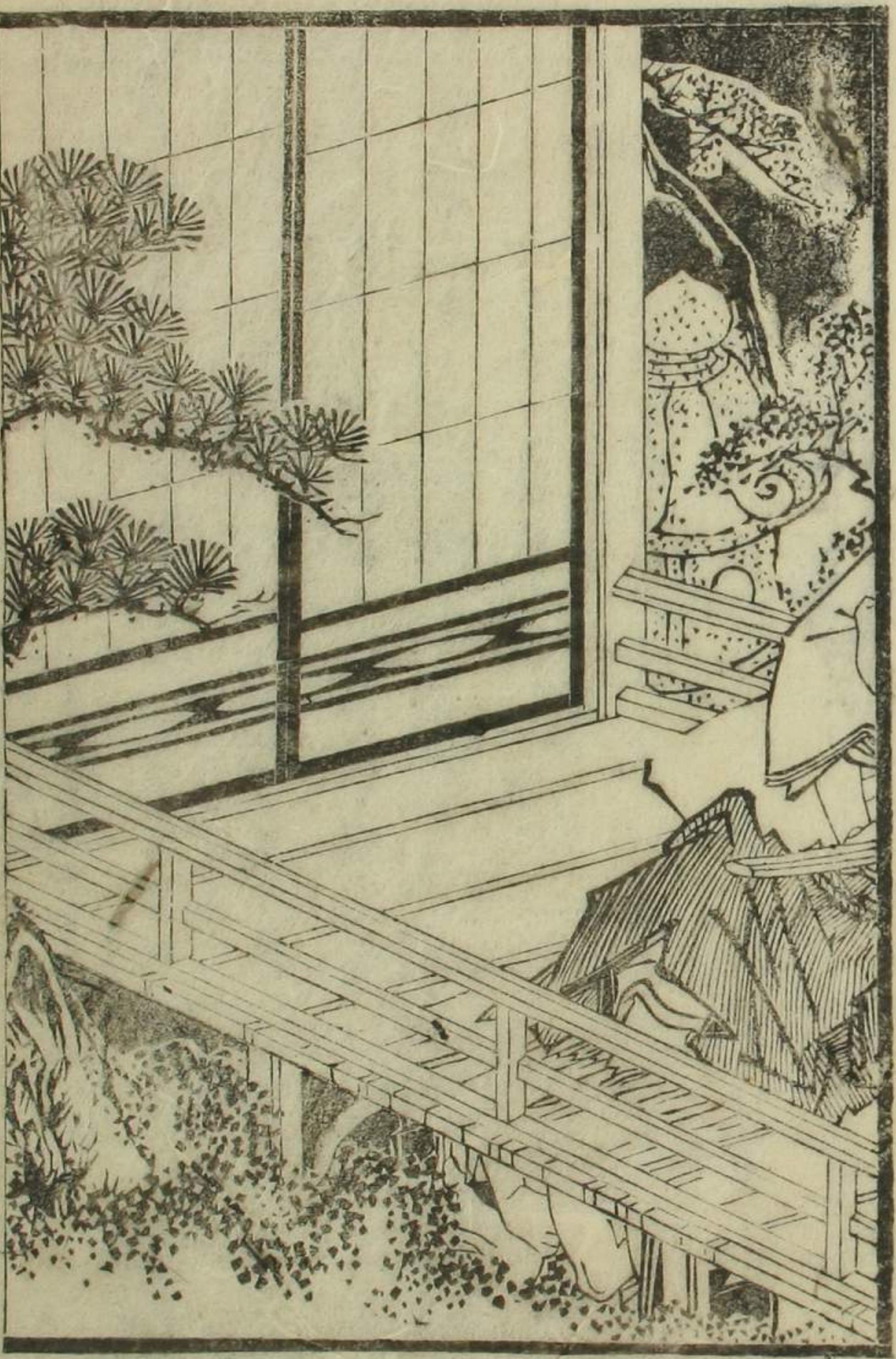
濡ら垂まひせぬかをぬまろこびも又ヌ昂ヘスリヤ殊乃れ被ふを
ふまと仕至ヘテ是く滅相すかをぬといふかお社どのトモシイヒ狀ハ
われゲ女房のかその、それ字ドヤ、うけとし、うめが女房に付がミ
まもも廉、うき柳う又がをぬと女房にぬの字ハ、ハテ史ナカアノ稱ド
や。余り母マタニ人ヒトぐうといぢで又多事の勤萬ゆるはと西詞ヒトシトヤ
はとハ必びよ云もるゆハあづぬと被もつあさせばたきみ悉小被被
を悉てをちうくれど薩ううの豆もとぢけ時十八九も一盞に不きひ
ふしけに坐てアラあいやとスル用乃あさらもケ穴松の又ヌ昂ヘ
名ひと叶へてそれのらぬかをぬまるとハかその、その字とお社乃とナ

ごへらんまう椎さきもくアマカウとてハふに梓シナノキアモルサムツく
いモロコ物モノトナアベ刃ハサミモくふ衣アヒ使スルト云クアヤンと思フテモキ肺ノド
うんを又アタマがトヒリヒリきのうれぬヌク一イチレマサマサふ家アヒ乃ヨリ盜城ハシマアヤアキホ
向むかて盜城ハシマトハアノふ家アヒ乃ヨリカハ一イチ体マサマサは井アヒの主シテやうナアトやヒヨウテ
世間シケンでヒ家アヒハシマと云クハシマのうが物モノを被ハサウエヒ無ナシが賣マツルハシマ
にも盜城ハシマハシマサハシマサアヒ物モノを被ハサウエヒ無ナシが賣マツルハシマ
加カ倍ガタハおれオレゼーゼーすスヒト西家アヒハシマアヒト丹家アヒハシマアヒト丹家アヒハシマ
又アタマト扇ハシマモテモテアヤアキホ
れあハともうくも今アヒハ波邊ハシマギアラ室アヒと名ハシマハシマ差シマトベキ
波邊ハシマアヒト心家ハシマト聲ハシマモテ度アヒのとあづアヒ已アヒモ不アヒ缺アヒトテ加カ倍ガタ

を押絞せんとハ恩怨の如人非人ち生並やど縁者の血汚れうち
こうてと力にふとくらむマアくち子簡由立候ハ後に詔たあれども事
ほど又みづかや連うけ正まの刀ハ先組金を清つてうりこれづれ一そ
君矣と報せんみ計り世小余されおひ又ス即みれども財令少く
せこ仕り門才同おにゆくれ紹介どおりへ何革冉び沢井乃名
役を立させ異人と心を盡せーういあつて兩日ハ食帰系ハテ缺ハ
一やと極あがみれど遠セー是小て先祖の恩と謝せーと存の外す
る今日乃ふ一まよと見る事親に如ドと老母が劫ぬせられ一も尤
其極美友のやうの西ノ中ノ紹介持南の沢井の名は公心えあれ

又
何ドヤ紹介乃持南沢井ノ名は心元あはまくは又みづかの
肉ハ危ひ紹介持南の家を汚徳まと云のうとサ波辺沢井ハ紹乃
紹乃奥儀と傳へ正妻と頃に戴く紹介の家筋也ぞや私欲に
眼くみ己が聞令を渠ぐ主同おの志内女が妻女にみ資を仕る高
生同れり大情ひ盜賊倒ヒむろぐ人の皮と被り人畜の又ス而候と
してく武士乃名跡紹介乃持南松と云迹も及ばぬトドヤトムラヌミシテ
及ばぬれ内々ト云うどト云たきとやまくのよじてねら木の松とぞ
モ小すつをぢ然もなりはく切放しものうちまかこ玉がぬがとづくと見え
見えりヤ中くあつたと度てうと云ふ家乃ひねみくねの事トもくみで切公威

せ冷
浦口町
金文書院



本作の業又と用ひじむねお乃も練ひ乃教えあくわ放しき切
口ナフ己が生根づねひ色灰をすに切へ小にコリヤ切にに刀目が並ひ
見そらすが切へまじゆりと切に不扇と比ゆりであけまぐんハ切るものでひきゆ
毛如きの盜城高まひの繩で人ハ切る物ドやかひと又みずきくむね又
ぬ人を切てアツヤリヤリヤ誰とベイヤ我とと力アリヨモ吉井ひ金井
スサナム一トキムセキムセキラタヒつきをまほ又切てうるとベ
ウシテアレハ立身アロスルモうんとちうてモモトミトミ
又ふまが白く大舟立つて波波挽あされいつが船へたといふ字を云ホと云高
といふ事と云ふふいね
網大にまと當れ一體一アマクシキ者とやてても古縁志の母立工の母立工の母立工
多まえの毒を万に存ドホヘ伊波等如きの人外家園の大すふからく

未ぬゆき風す力を上乃柳は家とあひて義事のりもへつ條かく
ト系へき川と美と本うへ圓をもどんとすもものへ生えを廻と被
と候んとあまくへ生えのととひまのふとも活きのせの口教書
タ紛失承ひてハ船を山の底うとくがづの妨げたまふ氣とよ
城と又みうと前や乃覆るとえてじめの城ととせばは氣とすりまふ
と只ひ入む西九へ丹布の反見小ひ本うへ谷谷祁取へ只今は上仗内入の先
九兵士を丹布の反見小ひ本うへ谷谷祁取へ只今は上仗内入の先
おり笠置ノ感を嫌り右内様にも退キ前を出迎ひ帝と名ふも宮室
候すされいとの知せでひう下る早はと仗内は入來とかへ松名へ其髪を
改やあと毛被仕らふあらば私、清先へイザ同左 といひく「外へ出て又す
とアモヒ入らる」

丹
心ととへ云あづく親人のぬいさんと云トも心とへんとへんとへん
されへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん
双さへ丹をあめかめ下さりて絶目乃事度也のとふ心とへんとへんとへん
むりとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん
つゑとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん
鷹的とへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん
用の上にてせをせよとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん
すきとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん
いとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん
まえ又又帝及海垂念にひふせの角位てやつて正宗の刀をとくと
させてハとふを又みくとへんとへんとへんとへんとへんとへん
金石はくとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん
金石はくとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへんとへん

えりにゆきの足をへうとくとはくそくへる又る全まことげかくも親人々はふ
かう手るやめどもねばのあ物へてすをあらわしよくよひくゆこへづ
コリヤ紹人々とづきておとうや又あくゆちかおとひ全まことくに切りうちへスリヤ
又みう迹でまきとまつ安全まを見事に切く羽をの段を見て戻入へスリヤ
おのせ又ス帝めとづけうーのを興ゑんうつらひる

たう紙中絵西方よ前太古にのう物ト一神田義方まつま田

源義光谷忍九造侍大せのう強若物燒みてさひだ入と本を入
まみの手とせんざれおなめちう進とさりやおの肉とくと踰
じ志がまれくヤアぬけがハムリキタんどうどひだきーのまのう物の
户とおぬさ斗ウドやスリヤお物にあつておもとれハ魚ヘハチア

とおひきど二うほくとぞれよ承へれば營領のま物へとけも太
次非故天皇とまうとぞれよ承へれば營領のま物へとけも太
素ひき心志ぬまち極り。ヤア右内の中脯及とびつ正義營領
のま物と誤つてわをへハテ廉おか奴のまことにま物へひ
ねてうれあるもあんとひそにうりまつて。極こそとまつとお
管領のま物へれあ義がむてひま一筆のほま金にがまうがす
ハテ過れの鬼筋のまえまつて鬼ぬ足難にヤアとづくとお
のアとづく石肉が脯及は不快に恨て重核ほ根柢テモ大切す
古上仗ぬ入未の御城又名取業おら先ハアま物やれとくごう名
にあると城ス帝をもとおちやをつこまつて又おもとくでろもとさくくる様
席外のまちんをねえと、下又おもすぐにまちんをとおもくとおひへきもすとお

又えうと見えよとまると城えう扇ふて又えうの奥と底まげ絵きへる



絵本洋装加賀越豪掛合財式

初中生三

四

浦川
西村内

